

「草を論ぜんとす」

花井弁護士の貴重な記録

伊庭想太郎の足跡を振り返るに当たって、多くの文献を参考にした。先人各位に心から感謝したい。

星刺殺事件で主任弁護人を務めたのは、刑事弁護の第一人者とうたわれた花井卓蔵（1968-1931）（写真左）だった。その著『訟庭論草 刺客事件を論ず』（昭和6年、春秋社刊）（写真右）は公判の全容を伝える貴重な資料である。

弁論で花井は、想太郎の行為が私憤ではなく、「国家の為」という公憤によるものだと、「故殺」を主張して情理を尽くした。本稿でも、しばしば引用した通りである。

同著の序文に、「余は訴訟に草を論ぜんとす、法を論ずるを欲せず」とある。「草」とは「種（くさ）」、つまり事件の根源、寄って来る所以を指すのだろう。それは、本稿のめざしたものでもあった。

貧しい士族の家に生まれた花井は、苦学して英



吉利法律学校（現、中央大学）で法律を修め、弁護士としては足利鉞毒事件で被害農民の側に立つなど、数多くの重大事件で際立った弁護活動を展開した。衆議院議員、貴族院議員も勤めている。

想太郎の生涯を考える際、刺殺事件に関しては花井の記録がほぼ万全といえるだろうが、その他の資料は断片的で、かつ乏しい。東京農大にもほとんど残されていない。明治の政治、世

相だけでなく、教育やマスコミの変遷を知る上でも、なお検証する意義は高いのではないか。

本稿では、「文友館」時代の想太郎については、弟子の小笠原長生の文章『伊庭の兄弟』と、その中に収められている長男孝の談話を引いた。長生の文章は、残念ながらその一部（コピー）しか手元にない。諸賢のご教示を乞う。

伊庭想太郎関連年表

西暦	和暦	社会の出来事（農学校関係）	想太郎年譜
1851	嘉永4		江戸・下谷に生まれる
68	慶応4	戊辰戦争始まる	
69	明治2	箱館戦争終わる	静岡へ移住
72	5		沼津の中根塾で学ぶ
74	7		上京、工部大学校で学ぶ
77	10	西南戦争	四谷に「文友館」開く
85	18	内閣制度発足	日本貯蓄銀行頭取、製紙会社社長など（時期不詳）
90	23	第一回衆院選挙	
91	24	（育英饗設立）	徳川育英会幹事長
92	25		育英饗饗長
93	26	（東京農学校設立）	東京農学校校長
94	27	日清戦争	
97	30	（大日本農会に移管）	東京農学校商議員
99	33		四谷区学務委員長
1901	34	星亨刺殺事件	収監
02	35		無期徒刑が確定
04	37	日露戦争	
07	40		獄死、享年56歳

参考文献

『読売』『東京朝日』『毎日』など新聞各紙
『旧幕府』（戸川安宅編）
『訟庭論草 刺客事件を論ず』（花井卓蔵述）
『伊庭想太郎公判録』（岡田常三郎編）
『江戸の武士 伊庭想太郎』（東台陰士述）
『伊庭ものがたり』（中根淑著）
『伊庭の兄弟』（小笠原長生著）
『最近社会百放談』（長谷川善作編著）
『一年有半・続一年有半』（中江兆民著）
『倫理叢話』（蟹江義丸著）
『尾崎三良自叙略伝』（中央公論社刊）
『東京経済雑誌』（田口卯吉の社説掲載）
『木下尚江全集』（教文館刊）

『図説 沼津兵学校』（沼津市明治史料館刊）
『伊庭八郎のすべて』（新人物往来社編・刊）
『星亨』（中村菊男著）
『星亨』（鈴木武史著）
『星亨とその時代』（川崎勝、広瀬順昭校注）
『星亨』（有泉貞夫著）
『日本新聞通史』（春原昭彦著）
『日本政治史』（升味準乃輔著）
『東京農業大学百年史』（東京農業大学刊）
『榎本武揚と東京農大』（松田藤四郎著）
『小説 東京農大』（竹村篤著）
『幕末遊撃隊』（池波正太郎著）
『遊撃隊始末』（中村彰彦著）
『明治暗黒星』（山田風太郎明治小説全集）

連載企画「東京農大ものがたり」は今回で終わります。2003年4月の本誌創刊以来、90回の長期連載になりました。筆者も本誌編集顧問を退きます。この間の皆さまのご厚情に感謝申し上げます。（秋岡）